

松山幸生先生講述

ヘブライ人への手紙に学ぶ

1996年1月から1998年10月

全33回--7

2022年2月

写者

小原靖夫

だから、今日、御声を聴いたならば

第3章⑦節から⑱節 神の民の安息

⑦だから、聖霊がこう言われるとおりです。

「今日、あなたたちが神の声を聞いたら、

⑧荒れ野で試練を受けたころ、

神に反抗したときのように、

心をかたくなにはならない。

⑨⑩荒れ野であなたたちの先祖は

わたしを試み、験し、

四十年の間わたしの業を見た。

だから、わたしは、その時代の者たちに対して

憤ってこう言った。

『彼らはずっと心が迷っており、

わたしの道を認めなかった。』

⑪そのため、わたしは怒って誓った。

『彼らを決してわたしの安息に

あずかせはしない』と。」

⑫兄弟たち、あなたがたのうちに、信仰のない悪い心を抱いて、

生ける神から離れてしまう者がないように注意しなさい。

⑬あなたがたのうちだれ一人、

罪に惑わされてかたくなにならないように、

「今日」という日のうちに、日々励まし合いなさい。

⑭—私たちは、最初の確信を最後までしっかりと持ち続けるなら、

キリストに連なる者となるのです。—

⑮それについては、次のように言われています。

「今日、あなたたちが神の声を聞いたら、

神に反抗したときのように、

心をかたくなにはならない。」

⑯いっただれが、神の声を聞いたのに、反抗したのか。

モーセを指導者としてエジプトを出たすべての者ではなかったか。

⑰いっただれに対して、神は四十年間憤られたのか。

罪を犯して、死骸を荒れ野にさらした者に対してではなかったか。

⑱いったいだれに対して、
御自分の安息にあずかせはしないと、誓われたのか。
従わなかった者に対してではなかったか。

⑲このようにして、彼らが安息にあずかることができなかつたのは、
不信仰のせいであつたことが私たちに分かるのです。

それでは今日は、先月に引き続きヘブライ人への手紙の第3章の⑦節から新しい段落の
ところに移って行こうと思います。

ヘブライ人への手紙の大きな組み立てから言って、1章の①節から4章の⑬節までのとこ
ろは、一つの大きなテーマで言いますと「神の言葉に聴き従おう」ということが中心に
なつて書かれています。

その意味で今月、そして来月にかけて学んで行こうとするところは、今まで学んで来た
プロローグの部分のまとめの箇所にあたると言つてよいと思うのです。¹⁹⁷

3章の⑦節から4章の⑬節までは、先ず聖書をひもといていただくとわかりますように
初めの部分で旧約聖書、詩篇95篇⑦節の後半から⑩節の（クォーテーションの中）の、
「今日、あなたたちが神の声を聞くなら、荒野で試練を受けたころ、神に反抗したときの
ように、心をかたくなにしてはならない」というところから始まつて、
「そのため、わたしは怒つて誓つた。『彼らを決してわたしの安息にあずかせはしな
い』と」。というところまでが引証されているわけです。

更に、⑫節から⑲節までは、その詩篇の引証部分の注解がなされている、その先
4章の①節から⑩節までは、その詩篇の御言葉の適用が述べられている、そして
最後の⑫節から⑬節では、神の言葉の力が強調されてこの部分が閉じられていると思いま
す。そういう大きな区分の流れを予め聖書の中から読み取っておきながら、今日の3章の
⑦節から⑲節までの御言葉をご一緒に丁寧に味わつて見たいと思うわけです。

第⑦節、⑧節

「だから、聖霊がこう言われるとおりです。『今日、あなたたちが神の声を聞くなら、荒
れ野で試練を受けたころ、神に反抗したときのよう、心をかたくなにしてはならない』」
¹⁹⁸

初めに「だから、聖霊がこう言われるとおりです」と書かれてあります。

この、だから=ディオという接続詞は、どこにつながっているのかは、なかなか難しい問
題だと思つます。本来ですと、3章の①節から⑩節までに書かれている事柄を受けて、だ
からこうなんですと言つているように思つますが、どうもそうではないのです。

むしろ「だから、あなたがたは心をかたくなにしてはならない」という風に述べていると
考えることもできるだろうし、あるいは⑫節のところまで持つていって「だから、あなた
がたのうちに、信仰のない悪い心を抱いて生ける神から離れてしまう者がないように注意
しなさい」というように勧めているのだとも採れるのです。

古くから「⑥節の終わり『私たちこそ神の家なのです』に、『だから』が掛かるのだと考えている方々」もしくは「⑫節に掛かるのだと考えている方々」それぞれ非常に大勢いるのです。皆さんがたが、ご存じの聖書学者の方々もどちらかの立場に属しているわけで、例えばリンディシュとかモファットあるいはスピック、ミヒエルなどはこの⑥節に掛かっているのだと捉えています。

それからカルビンを始めとするヘンゲルとかレーマンとかリッケンバッハなど、どちらかというとなり保守的な立場に立っている方々は⑫節に掛かっているのだと採っているのです。

文章の構文から言えば、詩篇の引用句に掛けるよりは、言葉を改めた⑫節に掛ける方が自然なのかもしれません。¹⁹⁹

けれども、この流れの中から捉えてみると、やはり⑥節に掛ける方がいいのではないかと私は思います。

「あなたがたはきょう神の御声を聞いたならば、心をかたくなにはいけません」と神は私たちに告げている、と受け止めた方が筋が通って読み取っていただけるのではないかと思うからです。

この「だから」という接続詞はすごく興味深いです。

一般に「ラヴィ文書」では何かを書く時に「だから、こうなさい」という形式を用いて書いています。ですから、この表現もラヴィ文書の書き表しに方に非常に似た形でヘブライの信徒に向かって書かれているのだと言えるわけです。

結局、教育的意図をもって、あるいは信仰生活の指導的な意図をもって、ここから聖書を講解してゆく、解き明かしていく、そういう姿勢がこの「だから」という言葉の中に見えて来るのです。

「だから、聖霊がこう言われているとおりです」といって幾つかの箇所において「出だしをつけながら語っていく」そのようなことをこのヘブライ人の手紙の著者はしているわけです。

私が考えますに、パウロが色々なことを説明する時に、旧約聖書の人物をもってきて、その人物像を述べながら「あなたがたもそうありなさい」とか「そうあってはならない」とか聖書の箇所を引用しながら手紙の中で人々を指導していったのと丁度同じように、ある意味では「このヘブライ人への手紙では『聖霊が言われます』ということで、聖書の言葉を自由に引用しながら語っていくという方法を取りながら御言葉をより深く自分たちのものにしてゆこうとした」そういう意図を見ることができるとは思います。²⁰⁰

ルカによる福音書がこれと似たような形で、「聖書の中でこう書かれていることが成就するためだった」というように書いていますが、やはり伝統的な一つの用法があるわけで、このヘブライ人への手紙よりもずっと曖昧な形ではありますが、ルカが同じような「ラヴィ文書的な方法」で書いていると見ることができるとは思います。

「今日」と「安息」について

ではいよいよ、本文そのものについて考えて見たいと思うのですが、詩篇の引証の中で一番最初に「今日」という言葉が出て来ます。この3章の⑦節から第4章の⑬節の中で大

事な言葉が三つ考えられます。

その一つが「今日」という言葉です。もう一つは「安息」という言葉です。

もう一つの御言葉がありますが、それはその御言葉が出て来たところで取り上げていきたいと思います。

少なくとも「今日」という、この言葉を私たちは先ずしっかりと捉えて見なければいけないと思います。「今日御声を聞いたならば…」というような言い方で書き始めているのは、4章の⑬節までの間に何回か出て来ます。

先ず3章⑦節に「今日、あなたたちが神の声を聞かならば」という形で書き始められます。更に3章⑬節で「『今日』という日のうちに日々励まし合いなさい」という形で「今日」という言葉が出て来ますし、⑮節では「『今日』あなたたちが神の声を聞かなら…」という言葉がもう一度引証されています。それから4章に入って4章の⑦節にもう一回繰り返して「『今日』あなたたちが神の声を聞かなら心をかたくなにすることはならない」と、同じ部分がその後三回丁寧な形で取り上げられているのです。

最初の3章⑦節のところで取り上げられているのは正に詩篇そのものが最初に書かれていったのと同様の状況で「荒野で試練を受けた頃…云々」と書いてありますから、モーセが出エジプトを敢行した「荒野の時代」におけるイスラエルに対して神が語りかけられたことを大変強く述べているわけです。

その次の、最後に読んだ4章の⑦節以降の部分では「ダビデを通して語られたのです」というように言っているわけで、「イスラエルの王ダビデの時代」に神は同じことをもう一度お仰いました。

その次には3章の⑬節に「あなたがたが最初の確信をもって…」という意味で、今度は「ヘブライ人の手紙が書かれたその時代」の人々に向かって、この言葉を著者は引用して「あなたがたは…」と言っているわけですから、ここで言われている「今日」と言うのは「一つの点を表しているのではない」ことがおわかりになるだろうと思います。

では、一体ここで言われている「今日」とは何を表しているんだろうかと言うことを少し考えて見たいと思います。

少なくとも「今日」という言い方で、神と私たちとの関係を取り上げようとする時に、先ずこの手紙を書いた著者の心の中にあっただのは「この事柄は切迫している緊急な問題なのだ」ということを訴えたかった、即ち「神があなたがたに働きかけて出会ってくださるその出来事は、繰り返しがきく問題ではないのだ、一回限りの今、ここで、起こっている真剣な出会いなのだ」という意味を込めて「今日」と言う言葉を語るのです。

それはかつての時代、誰々の時の「今日」というような「日付的な意味ではなく」、事柄を表す「神と出会うその時」を「今」という言い方で表現することができるのではないかと思います。

その意味では、ここで言う「今日」という言葉は、別な表現をすれば「限りなく終末的な捉え方」ができるのです。そこにおいてこそ決着がつけられる『その時』なのだ、という

意味さえも持っているのです。それゆえ。神と出会う、神の声を聞くことができる『その時』が私たちにとっては究極的な決断が迫られる時であり、そのことによって私自身がどのように神と関っていくかが問われる大事な問題なのだ、という位置づけをして、

「今日」という言葉をここでは用いているのです。（森容子先生でなければできない校正です。有難うございます）

私たちは往々にして「時」というものを、何となく川の水のように流れ去っていくもの、次から次に訪れ来るものというような捉え方をしてしまうことが多いですが、特に、このヘブライ人への手紙が書かれた時代は、ある意味で「グレコ・ローマン的な思想」があって、地の表に「人本位な人間中心的世界」を成立させようとしている中にあり、もう一度聖書に立ち返るために結局何が大切かと言ったら、「私たちの人生は、流れ去って行くものではなく、神の前に覚えられているものだ。私たちの『今日』は、やがて明日になり、過去になってしまうような流れの中でのある部分を指しているのではなく、『今日』という日は、私が生きた生きざまとして神に覚えられ、未来に結びついていく、終わりの日に向けて『今日』が位置づけられていくのだという捉え方をしていくこと」が大切なのだということが、「今日」という表現を有するこの詩篇を取り上げた大きな理由であったと言ってよいと思います。

私たちは信仰の問題は「信じました」「信じています」という言い方が常用され、それほど緊急性がある事柄としてではなく、「私は信じたんだからずっと信じているのです」というような格好で今の自分の信仰生活をそれなりに評価してしまうことが多いのです。

だが、ここで問題にしようとしているのは、

「今、神と生きた関わりをもっているのか」

「今、神の御声を聞いているのか」

「今、神の御声に対して私たちは忠実に従っているのか」

という問いかけのその中で、「今日」という問題が取り上げられているのです。明日じゃない、あるいは昨日じゃない、今あなたが生きているその現実の中で、これはどうなのか、と言う問いかけがなされているのです。そういう神の前における「今」、それがここで言われている「今日」という言葉の中に出て来ているわけです。²⁰⁴

「今日、あなたたちが神の声を聞いたら、荒れ野で試練を受けたころ、神に反抗したときのように、心をかたくなにはならない」

古い詩ですから、この詩篇は何度か味わったり読んだりしたことがあると思います。

ついでですから旧約聖書の詩篇95篇を開けて見て…多少の違いがあるのにお気づきになるとと思いますが、その⑧節のところを読みます。

「今日こそ、主の声に聞き従わなければならない」これは⑦節の一番最後の行です。

「あの日、荒れ野のメリバやマサでしたように心をかたくなにはならない」

同じ詩篇を引用していますが、ここではこの新共同訳の詩編の言葉とは多少違った表現がヘブライ人への手紙には出ているのです。

このヘブライ人への手紙は多分「七十人訳の聖書から採ったもの」であろうと思うので

その意味では多少違いますけど、ただここで出て来る言葉の違いを少し言語的な型で捉え直して見ると、次のように見ることができます。

例えば「メリバ」と詩篇の方に書かれている言葉が七十人訳では別な表現、その事柄がもっている（メリバというのは「反抗」という言葉、あるいは「怒らせること」等を表す）用語となり、その意味でここでは「神に反抗した時のように」という言葉でこのメリバという言葉が訳している。

あるいは「マサ」というのは、「試練」とか「誘惑」とかいう言葉ですから荒野で試練を受けた頃という形でマサとメリバが入れ替わっていますが、七十人訳の方は、訳としては同じ言葉でも、一つは『その言葉のもっている意味』で表現しています。²⁰⁵

一方、原典では、それをそのように置き直さないで、地名のように(マサというのは元来地名なのですけれども)そのまま書いている。メリバとかマサという言葉が実は神を怒らせたり、試みに出会ったりした『場所』ということになるのだらうと思います。

そのマサとかメリバという言葉、今日のこの箇所は出エジプト記の17章の①節から⑦節、民数記の20章の①節から③節のところに出て来ますので、その辺をちょっと開けて見ていただきますと前後関係がよくわかって来ると思います。

例えば、今の言葉ですが、民数記の方の20章の①節から③節のところをちょっと開けていただきますと「メリバの水」という小見出しで書かれているのです。

「イスラエルの人々、その共同体全体は、第一の月にツィンの荒野に入った。そして民はカデシュに滞在した。ミリアムはそこで死に、その地に埋葬された。さて、そこには共同体に飲ませる水がなかったので、彼らは徒党を組んで、モーセとアロンに逆らった。民はモーセに抗弁して言った。『同胞が主の御前で死んだとき、我々も一緒に死に絶えていたらよかったのだ。なぜ、こんな荒れ野に主の会衆を引き入れたのです。我々と家畜をここで死なせるためですか。なぜ、我々をエジプトから導き上らせてこんなひどい所に引き入れたのです。ここには種を蒔く土地も、いちじくも、ぶどうも、ざくろも、飲み水さえもないではありませんか』」

と言って激しくモーセに向かって抗弁をしています。そういう抗弁の中でモーセは神に祈る、そうすると ²⁰⁶

「モーセとアロンが会衆から離れて臨在の幕屋の入り口に行き、そこにひれ伏すと、主の栄光が彼らに向かって現れた。

主はモーセに仰せになった。『あなたは杖を取り、兄弟アロンと共に共同体を集め、彼らの目の前で岩に向かって、水を出せと命じなさい。あなたはその岩から彼らのために水を出し、共同体と家畜に水を飲ませるがよい』

モーセは、命じられたとおり、主の御前から杖を取った。そして、モーセとアロンは会衆を岩の前に集めて言った。『反逆する者らよ、聞け。この岩からあなたたちのために水を

出さねばならないのか』モーセが手を上げ、その杖で岩を二度打つと、水がほとぼしり出たので、共同体も家畜も飲んだ」（注：これがモーセの罪と言われます。主語が神でなくモーセで、それ故に、彼はカナンへ入れませんでした。こうした言葉に神さまは厳格です。森先生からの学び）

このように書いてあるのです。「メリバ」というのはここに出てくる言葉であるわけです。

出エジプト記17章①節から⑦節のところにも、「岩からほとぼしる水」ということで同じようなことが書かれており、ここではその場所を「マサとメリバ」と名づけ「試しと争い」と名づけたと書いてあります。この詩篇はそういう出エジプト記の出来事を背景にして書かれたもので、それを「ヘブライ人への手紙」の中で引証したことは、正に「出エジプトの荒野における出来事を、もう一度思い起こしなさい」と訴えているわけです。

歴史は、ある意味では「かつての自分たちを思い起こすこと」ですが、「思い起こす」という日本語がどうも座りが悪い、ピッタリ来ない。他の表現はないかと言うと、例えば、ヴァイツェッカーが「私たちはこの日(5月23日)を忘れてはならない」と皆に向かって訴えているのです。

「忘れてはならない」ということは、「想起することだけではなく、私たちの命の生きざまの糧にしなさい」という意味があるわけです。ですからあの「荒野の四十年」という有名な演説をします。戦後四十年目にそれを語って、「四十年間は、神から与えられた試練の時であって、私たちはその試練の中で神と出会って来たのだろうかということを真剣に問う。そして、そのように私たちを神は愛し、追い求めてくださっているのだから、その愛に応えていこうではないか」というのが彼の語ったメッセージの内容だったのです。

その「忘れてはいけない」「思い起こしなさい」「記憶しなさい」という呼びかけは裏返していえば

「あなたがたはそのことに立って『今』を生きていますか、あなたがたの『今』はその上に成り立っている『今』なのです、ということをついでも覚えておきなさい、いつでもそれを明確にしなさい。

例えば太平洋戦争の問題、あるいは世界大戦の問題であれば、そのことに対する懺悔と、そのことに対する償いのために今日を生きる生き方をしてゆきなさい」。ということがドイツの国民に向けて語られる。

日本も、確かにいまから51年前に「私たちは悪うございました」と言って戦争を止めました、敗戦したのです。国が破れたのです。その時には「二度とこんな戦争をするような国にならない」と皆が決意したわけです。そして、そういう決意の上に立って「私たちは兵力を持たない、武力を持たない国になるのだ」ということを言って、「世界のすべての国々が私たちに対して戦いを挑んだとしても、私たちはそれに対して戦いません」という決意をしたのです。

でも、「そんな決意をしたのかな」というような状況が私たちの国の中ではどんどん拡張されて来ている。そして、「私たちは多くの人々に耐えがたい苦痛を与えて来ました」というようなきちんとした懺悔も保証もしないで51年間歩み続けて来ました。「かつてこんなこともありました」という「覚え」だけなのです。

そしてそれを覚える時には、自分たちも同時に被害を受けましたという形で覚えて行く。

「広島には原爆も落とされました、長崎にも原爆は落とされました、私たちは世界でただ一つの被爆国なのです」という言い方で「自分たちの仕掛けた戦争をどこかで正当化してゆこうとする」そのようなこの国の姿勢は、今日のこのヘブライ人への手紙の中で詩篇を引証して、読者自身の立ち位置への問いかけをなした著者の気持とはすごく違っているだろうと思います。(日本の2021年迄の変化を深く憂いておられた松山先生、召天された後の変化、正に武力行使をしかねないところまで追い込まれた「今」を更に激しく嘆き、私たちに覚悟を求めておられるように感じます)

「戦争の日を覚えなさい」という「覚えなさい」が、「あの悔しさを、とか、あの惨めさを」ではなしに正に、「あなたがたがなぜ四十年間荒野でさまよい続けたのか、考えてみなさい。それはひとえにあなたがたの不信仰のゆえだったではありませんか。しかも、それはあなたがただけの問題ではなく、あなたがたを指導したモーセの不信仰にもよっていたではありませんか」と、ここではすごく厳しい裁きの言葉を、ある意味で、この手紙の著者がヘブライ人に向かって投げかけているのです。²¹⁰

「あなたがたの先祖は神に背いた。しかも、神から民を導けと命じられた指導者も神の言葉には不忠実だった」。それがこの「マサとかメリバ」という言葉に表れるわけです。神がせっかくださった水を、自分たちの不信仰、不従順のゆえに苦いものにしてしまった。その苦さは、実は不信仰がもたらした苦さだったのだ。神の恵みの水が恵みとして人々に伝わらなかった理由は、正に神に対する不従順が原因だったのだ、というあたりが強く出て来ているわけです。

「心をかたくなにする」とはそういう意味で「神に対して不従順になる、自分の気持が先行して神の思いを拒絶する」そのような意味が入っていると言えます。なぜここでこんな言葉をあえて著者が引用したのかというと、およそ二つの理由があると思います。

一つは、今、彼がこの手紙を書き送っているヘブライの信徒、彼らヘブライ人たちが迫害や同胞からの抑圧の中で、伸びやかに自分たちの人生を楽しんでみたい、そのためにもう一度ユダヤ教に立ち返ろうか、というような考えを持っている人々が少なくなかった。あるいはこんな思いまでして信仰を持つのだったら、もうつまらない、だから信仰を捨てようかという考えを持っている人もいたということです。

「こういう状況が正に、荒野における四十年においてイスラエル人の行きつ戻りつした時の思いと同じなのです」。そして更に、

「あなたがたは、あの荒野の四十年間の姿を経験しているのだ、しかしよく考えて見なさい。辛い四十年間の歩みの中で、本当に救われるにはどうしたら良かったのか。残念ながら。神に対して不従順であった者は誰一人カナンの地に入れなかったではないか。神の約

束を得ることは、神の言葉を信じ、従い続けることに依るのであって、それ以外のものには全く依らないのだ」と、どうしても訴えたかったのです。それで、そのことが詩篇95篇の引証の中に非常に強く出て来るのです。211

第⑨節から⑪節、

「荒れ野であなたたちの先祖はわたしを試み、験し、四十年の間わたしの業を見た。だから、わたしは、その時代の者たちに対して憤ってこう言った。『彼らはずっと心が迷っており、わたしの道を認めなかった』。そのため、わたしは怒って誓った。『彼らを決してわたしの安息にあずからせはしない』と」

大変厳しい詩篇の言葉を持って来ているのです

「神が怒られた」というこの言葉はあまりなじまない言葉です。私たちの神は怒るに遅く赦すに早い神であり、すべての罪を黙って赦してくださる神なのだ、というように思いたい、あるいは思い込んでいる。211

ところが、私たちがもし神の国に行けなかったとしたら、それは神が私たちを拒絶なさったことなのだ。勿論、具体的な形で神が「駄目だよ」とおっしゃることではないでしょう。けれども神に拒絶されたことなのだ。それを怒ったとか憤られたという形でこの著者は書くわけです。

つまり、私たちの神は、赦す神であると同時に、怒られる神であると言いたいわけです。何でもかでもみんないいよと言う神ではないのです。

もう少し別な言い方をすれば、ご自分との間の筋を通される神、だから筋さえ通していれば、それがどんな人間であっても神は喜んで安息を与えてくださる。しかし筋を通さなかった場合はどんなにその人間が高潔な人間であっても、財産や地位や名誉があっても、御自分の国には招き入れはなさない、「それが裁きなのだ」という考え方をこのヘブライ人への手紙の中で著者は先ず示そうとしているのです。（この筋を通さなかったのが、水を出したモーセです。森先生）

更に、具体的に言えば、「神がエジプトの国から導き出してカナンを継承せしめようとしたイスラエルは、その子どもたちの時代になって、カナンに入るようになったのだ。けれども、あのエジプトを出た人々の中でカナンに入ることはできたのは、たった二人だけだった。それ以外の者は、皆、神に対して不従順だったので、カナンに入ることはできなかった。それは、あなたがたはよく知っているだろうと言うのです。勿論その二人というのはカレブとヨシュアという二人の若者だったのですけれども、それ以外の人々は皆、あの川を渡る前に死に絶えてしまった。そして、その子孫が入って行く、神に背かなかつた人々が入って行く、神によって新しく生まれた人々が入っていくのです。そういう形でイスラエルの信仰は継承されていった」212

なぜそうなったか、それは長い年月がかかったせいではない。長い年月をかけたのは実はあなたがたの不従順、不信仰がそうさせたのです、というように述べているわけです

第⑫節、

「兄弟たち、あなたがたのうちに、信仰のない悪い心を抱いて、生ける神から離れてしまおう者がないように注意しなさい」

もしあなたがたの中で、神を信ぜず、お従いすることができない人間が出たら、その人々は滅びる。だからそうならないように注意しなさい。互いに勧め合いなさい、励まし合いなさいと呼びかけるのです。

第⑬節

「あなた方のうちだれ一人、罪に惑わされてかたくなにならないように、『今日』という日のうちに、日々励まし合いなさい」

ここで最初に⑫節で「注意しなさい」ということが出て、更に言葉が続けて⑬節に励まし合いなさい」という言葉が出て来るのです。

第⑭節、

「私たちは、最初の確信を最後までしっかりと持ち続けるなら、キリストに連なる者となるのです」²¹³

これは挿入句ですが、「私たちがキリストに連なる者として生きていくことは、初めてイエスをキリストと信じた時の信仰を、微動だにさせずに生きていくことによるのです」と言っています。つまり、「イエスがキリストであることを百パーセント信じ、この方以外に私を救ってくださる方はいないと信じ、告白した時の信仰を徹底的に守っていくことです」と語り続ける。これはある意味では、自分の信仰を堅持することですが、更にその信仰を継承していくことにも関わっていく大事な言葉だと思うわけです。

第⑮節、

「それについては、次のように言われています。『今日、あなたたちが神の声を聞くなら、神に反抗したときのように、心をかたくなにはならない』」

あなたがたがキリスト・イエスにしっかりとつながっていくために大事なことがこの詩篇の冒頭にある言葉なのです、と語ります。

第⑯節から⑲節まで、

「いったいだれが、神の声を聞いたのに、反抗したのか。モーセを指導者としてエジプトを出たすべての者ではなかったか。

いったいだれに対して、神は四十年間憤られたのか。罪を犯して、死骸を荒れ野にさらした者に対してではなかったか。

いったいだれに対して、御自分の安息にあずかせはしないと、誓われたのか。従わなかった者に対してではなかったか。このようにして、彼らが安息にあずかることができなかったのは、不信仰のせいであったことが私たちに分かるのです」

「いったいだれが、神の声を聞いたのに、反抗したのか。モーセを指導者としてエジプトを出たすべての者ではなかったか」

これはすごい言葉です。「だれが、反抗したのか」、「だれに対して反抗したのか」そして「一体だれに対して神はそうおっしゃったのか」というように、次から次へと言葉を積み上げながら、この詩篇についての解説をしています。

⑯節では、「だれが、神の声を聞いたのに、反抗したのか」

⑰節では、「だれに対して、神は四十年の間憤られたのか」

その次の⑱節では、「だれに対して、御自分の安息にあずかせはしないと、誓われたのか」

そのように問いかけながら、神と私たちとの関係は生きた関係なのだ、ひとたびあることが起きて、それが形式的に片付くという無機質な関係ではないのだ、ということを強く訴えています。

「神の声を聴くならば」というこの部分、“神の声を聴く”、とはどういうことなのでしょう。それは先ず、私たちには、（この時代の人たちもそうだったのですが）二つの神の声を聴く方法があったのです。

（日々聴き続ける）

一つは、「人間の声が満ち溢れているこの世の中で、一人一人が『個人的に』神の御言葉に耳を傾ける、そしてその御声を聴き取る、そのことがすごく大切なのです」。

しかもそれは、例えば、ある集会に出て一所懸命神の声を聴いたというような一時的な事柄ではなく、毎日毎日その神の御声を聴き続けることが大事なのです。

ここで荒野のたとえを出してヘブライの人々に向かって呼びかけている著者は恐らく、あの荒野において起こった出来事をもう一度思い起こさせる、出エジプトのあの出来事を思い起こさせている、と言ってよいと思います。

マナは日毎に新しく与えられた。しかし昨日のマナは今日の命にはならなかった。毎日マナを新しく神から受け、それを自分たちのものとして受け止めることしか、私の命を引き延ばしてゆくこと、あるいは永らえさせて行く道はなかった。ですから、あなたがたも毎日新しく神の言葉を自分の心の中に受け入れなさい、聴き取りなさいと呼びかけているのです。

使徒言行録の中では「ペレヤの人々は毎日聖書を調べていた」（使徒言行録17章⑩節）と書いてありますし、あるいはイエスが弟子たちにお教えになった主の祈りの中でも、

「わたしたちの日毎の糧を今日も与えてください」（マタイによる福音書6章⑩節）と教えておられます。ここで言う糧とはただ単に肉体の糧だけではなく、心の糧をも含めて毎日の糧を毎日与えてくださいと祈りなさい、ということです。

言い換えれば、「今日も御言葉を与えてください、御言葉によって養ってくださいと、神の前に祈りなさい」とイエスはお勧めになったのです。これは個人的な生活の中でしなければならぬこととして示されているのです。216

(教会での交わり)

もう一つは「神の御声を聴く場所としては『公の集会』あるいは『主の日ごとの礼拝』で神の御言葉を心して聴く、一所懸命聴く、そのことがすごく大切なことなのです」。ネヘミヤの記録の中に、「神の律法の中に書いてあることを読んで説明したので、多くの民はその読まれたことを理解した」というように書かれています。(ネヘミヤ記8章⑧節)

きちんと神の言葉が読まれて、それについての説明がなされたので、皆は神が何をお考えになっているのかがわかった。このことが、「ネヘミヤによる宗教改革」の大きな原動力になったのです。神の言葉に依らないで神の宮が新たになるとか、神の群れが新しくされるとか、そういうことは絶対はない。神の言葉によってすべてのことが進められて行く。ですから、きちんと公の場で神の言葉を聴いてゆくことは非常に大事な事柄なのだということになるのです。

例えば「ヨハネの黙示録」という、聖書の最後の部分ですけれども、ここに、「この預言の言葉を朗読する人と、これを聴いて、中に記されたことを守る人たちは幸いである。時が迫っているからである」(ヨハネ黙示録1章③節)と書かれています。きちんと神の御言葉を読み、その読まれた事柄を一生懸命守って生きてゆこうとする人々は幸いである。神の言葉を聴くことは、ただ単に聞き流すことではなく、それを守って行なうことだ、そうすれば、その人々は…というように書かれているわけです。

私たちはそういう部分をしっかり考えていかなければならないと思うわけです。

「神の声を聴きながら、それを聞き流している姿を、このヘブライ人への手紙の著者は『背教の行為』、教えに背く行為、神の愛を拒絶する行為というように考えているのです」。だから、あなたがたがこの時代の中で神の声を聴いた時に聞き流さないように注意して生きていきなさい。一所懸命になって聴きなさい、とそのように呼びかけています。

そして、その御言葉を本当に一人一人が自分自身で自己検証し、神の言葉にしがみつくように生きてゆきなさい、神の言葉を聞いても信仰をもって受け止めないでいるような在り方をしてはなりません、と言っているのです。

正に、「私たちは今この神の赦しの時、しばしの時、間と間の時、再臨に至るまでの今日この時に、神の言葉を真剣に聴き、生きることが大事です。御言葉を聴いたならばそれに従順に従って実行しなさい」と語るのです。

⑧節のところでは、従おうとしなかった人々(神との間に筋を通さなかった人々)が信者の中にいたために、そういう群れの人々は皆滅びてしまったのです。だから、あなたがたもそのような者にならないようにしなさい。

あなたがたの従順によって神が与えてくださる恵みを、自分たちのものとして感謝をもって受け止めなさいと勧めるのです。そしてそのためには「弱い私たちは自分たち一人一人では無理だから、お互いに神の言葉の前に新たにされ、励まし合い、助け合い、支え合って神の言葉を生きてゆこうではありませんか」と勧めているのです。219

この「励まし合ってゆく」という勧めの言葉は裏返して言えば、このヘブライ人への手紙の著者は「個人的な救い」より「教会としての救い、神の群れとしての救い」ということに、より大きな問題点を置いているように思います。

「教会の交わり」とは、正に神の言葉に支えられた者たちが励まし合うための群れの交わりです。神の言葉を共に聴き、そこで与えられた恵みを分かち合いながら、お互いが支えあって生きてゆく群の交わりです。

だから礼拝を献げ、交わりを持ち、互いに助け合うために祈り合い、仕え合っているではありませんか。「それこそが神の御前における共同体なのです」という呼びかけをここでしているのです。私たちはそういう意味で、非常に大きなスケールの中でこの手紙がヘブライ人に向かって書かれたことを、心のうちに留めておきたいのです。

(安息に入る)

4章に入って、更に現在的な適用が出て来るわけで、今日の部分は、「旧約の中に起こった出来事が、今もなお私たちにとって有効であり、大切な問題なのだということを非常に具体的な形で述べている」と言ってよいだろうと思います。

「最初の確信を最後までしっかりと持ち続けるなら」という挿入句のもっている意味は非常に大きいわけです。「神に最初に出会ったあなたがたが、あるいはイエスをキリストと信じることがゆるされたあなたがたが、キリストによる裁きの日まで、その信仰を曇らせることなく明確に持ち続けることができたならば、神が与えてくださる『安息』に入ることができます」219

勿論この前半の3章の部分では「安息」という言葉が、もしある場所を示すとするならば、「神の約束の地カナン」を指していたと考えられるわけですが、究極的には、神が召してくださる「神の国」への招き、ヨハネによる福音書の中にあるように「わたしの国」と神が呼んでいらっしゃる国、そこに入れていただくことができるのは「私たちが神の御声を聞き、それに従って生き続ける時です、疑いなく今を生きること、今を神の御言葉の中で生かされている喜びとして生き続けること、証しし続けること、そのことによって初めて神の国にあなたがたが入ることがゆるされているのです」とここでは述べています

「パウロが言った『信仰義認』へと至るアプローチと、ヘブライ人への手紙のアプローチとは多少おもむきを異にしています。しかしパウロが言った『信仰義認』と著者の言わんとする中身は同じなのです」

「神を信じて生きる。」こととは、敵対するものが現れても、神が味方ならば恐れることなく神の言葉に生きようではないか、もしそれが私たちの命を奪う力であるならば、喜んで

で命を捨てようではないか、と言っているわけですから、正に神の言葉に聞き従うという点においては同じなのです。（「神を信じて生きる」ことの凄さを、これ程に表現しておられる方はないでしょう。ただごとではありません。森先生のご指摘・オミクロンも敵対するものの一つです。松山先生の生涯はこの信念・信仰によって貫かれました。）

ただパウロは異邦人に向かって語りますから、表現として多少違ったニュアンスをもって語っていくわけです。それに対して、ここではユダヤ人、律法を持った人間に向かって語っているわけですから、表現の仕方が異なっているのです。

220

「終わりの日に神を信じ続けて生きた者こそ、神の国に入る安息がゆるがされているのだ、神は既にそれを約束してくださっているのだから、耐え忍んで生きてゆこうではないか」という呼びかけは、正に異邦人に向かって、ユダヤ人に向かって、神から等しく呼びかけられた呼びかけなのだと思えます。

内容的にはだいぶたくさんの方が述べられているところなので、4章に入ってからもう少し一緒に学ぶ機会があると思いますから、今日は外回りの事柄、構造上の事柄を中心にしながらお話をしてみました。

勿論何度か申しましたように、ヘブライ人への手紙の大事なポイントは「聴く」ということ、その言葉に非常にウエイトが置かれている、「神の言葉に聴く」ということは大事なのだ、そこで「聴く」という言葉を使う時は、「聴いて従う、聴いて生きる」というところまで結びつけた意味での「聴く」なのです。「決して聞き流すことではないのだ」ということ

とをもう一度確認をしながら第4章の学びにつなげていきたいと思えます。何かご質問がございましたら、お聞かせいただけたら幸いです。

1996年7月13日

写者あとがき

まだ始まったばかりですが、大変なことを始めてしまったと畏れを感じています。

正に自分の信仰が問われています。松山幸生先生のお声を聞きながら写経し、激しく魂が揺さぶられ、森容子先生の校正とご指導をいただき深い意味を学び、イエス・キリストの愛、恵みを実感しております。

知らないことばかりで、単に写せばいいという単純な発想の不謹慎さを反省しております。森容子先生からは、私の発想は聖霊のお導きであるとお言葉を頂き、正にそれ以外のなにものでもないと驚き謹んで進めさせて頂いております。

まだまだ初歩的なミスを繰り返しておりますが、森容子先生の温かい眼差しと寛容の中に包まれながら、一文字、一点、文字の置き換え、そして、初めての人にでも分かるようにと短い挿入、カッコ付きの説明で、聖書の御言葉を縦に読み、横に読み、奥深くを味わうことができるようになってきました。聖書を学ぶには知恵と啓示の聖霊の導きが必要だと今更に実感しております。

本文中「―――」書は原則として原文に忠実に付しております。アンダーラインは私の私のための強調でございます。

松山幸生先生が巻頭で「ヘブライ人への手紙」は旧約聖書と新約聖書の橋渡しになる役割を持っていると書かれておられましたように、当時の文化、風土、慣習と歴史を記した旧約聖書を理解しないと読み進めない難解なところがありますが、その難解さが、現代にそのまま通じるところが多いことが分かります。

「旧新約聖書は神の靈感によってなり」で始まる信仰告白を学び直しております。

2022年2月1日